

# 仏教の実践の根拠となる世界観

——現代社会の病理とその克服の道——

浄土宗百萬遍知恩寺

法主 林 靈 法

## 一、近代ヒューマニズムとその変貌

現代文明が楽天的な進歩史観の上から、将来における人類のはかり知れぬ幸せを約束して来た事実に対して、いまやそのうぬぼれが虚構であったことを人間自らに問いなおすべきときに立ちいたった。現代の文明をこれまで造りあげて来た支柱は、科学技

術と巨大な資本力との抱合の上に、無限にまで生産力の可能性を夢見た思いあがった人間中心主義の世界観であった。

近代とはヨーロッパにおける中世の神中心の世界観に対して、近世のルネッサンスに始まる人間中心の世界観の時代である。中世においては、神及びその代理者たる法皇を信仰の頂点としてそのもとに国王から武士農民という壮大なゴチック式社会構造を

もって、人間個人の生活はすべて神と教会の手に掌握されていた。民衆の生活は、そのすみずみまで教会の煩鎖な教条によって束縛指導されていた。ところが、十四、五世紀のルネッサンス、それにづく宗教改革を通して法皇や教会の外的な教条規範はきびしく批判せられ、人間にとりて最高のものは神の名において強いられる外的な教条律法ではなくて、人間個人の自覚の上に立つということであった。

ところで、この近世初期のヒューマニズムは、その当初にあつては、ギリシャ古典を通して生命に溢れた人間のとらえ方であつて、その人間は冷やかな理性的なものではなくて、意志し、行動し、情感ゆたかな全人間的な生命にあふれたものであつた。だから、人間と人間をとりまく環境としての自然のとらえ方においても、当時の特に芸術的労作が語っているように、人間と自然とは脈搏相通する共同の命に生きつづけていた。自然は命あり価値あり美なるものとして人間との共同の命に息づいてきた。とこ

ろが、その後科学的な学問知識が開拓されていくにつれて、この創造と情感ゆたかな人間と自然とのとらえ方が、漸次変貌していくこととなった。即ち大陸では十七世紀にデカルトが出て「われ思う、故にわれあり」を学問の前提として、一切を疑うが最後に疑う自我のはたらしきの考えることだけは否定出来ぬということから、人間を思惟する自我と規定し、ここに理性的な人間を生み出した。そして、この理性的自我に対立するものとして物質としての自然を定立したのである。このように主観と客観というように対立的にうけとられてくると、理性的自我より自然への挑戦が始まる。元来、客観という語はギリシャ語源からすると、「前に投げ出されたもの」ということで、自然は人間の前に投げ出されたものと言われるものであつて、人間理性はやがて自分の前に投げ出されてあるものに挑む存在となる。対象的な自然界に行われている因果必然の法則等を抽象し、これを逆手にして今度は逆に自然の世界を自由

に人間が利用しうることとなり、やがて、支配をなしうることとなった。大陸のデカルトと並んで、当時英国ではベーコンが経験論の立場から、「知は力なり」というモットーのもとに人間理性の上からの科学的知識による自然界の支配を同じように示していた。やがて、それが十八世紀の啓蒙時代ともなれば、人間と自然との二元論の上に立つて機械的物質としての自然理解の科学学問は大いにすすみ、人間は自由に自然支配の確信を深めることとなる。

以上の如く、近代ヒューマニズムというのはその初期において生命の共感を通して統一的・調和的にとらえられていた人間と自然とが分離され、それまで自然の中に生きていた調和的な目的や美などの価値的なものがすべて排除されてしまった。自然は単に空間的に延長をもつ機械的な物質となり、これと対立する人間の理性的自我はこれを人間に利用の出来るように支配することとなった。神を否定した人間は、ここでは言わば人間自らが神の座にのぼる格好

となっていた。

## 二、近代的自我のカント哲学

かように、人間を理性的自我としてとらえた近代ヒューマニズムは、その思想的完成をカントの哲学の中に見出した。

ニュートンやライブニッツの科学学問がカント哲学の出発点であるが、先ずカントはこの自然界を人間の主観に対して単に与えられた存在とは見ない。

機械的な自然というものは、理性的自我の主観の側における時間空間の直観の形式、並びに主観のはたらきたる先験的な因果等の範疇の形式によって構成されていくことを明らかにした。それまで認識ということは、主観をはなれて客観的に定立する存在から主観が受け身となってそれを映し出していくことだとされたが、経験とか知識というものが、主観の方が主観にそなわる先験的な形式によって創り出し

ていくものだということとなった。これは認識におけるいわゆるコペルクニクスの転廻であつて、機械的な自然界に対して、人間の主観は構成的能動的な立場をもつこととなった。かくて、カントはこの機械的な因果律の支配する自然界から神を追放した。また人間の自由も靈魂の不滅も否定したのである。人間と言へどもこれを對象的に自然の一部と見るとき、その身体もその心理も對象化せられて因果必然の機械的な自然的現象の連鎖となるのである。

カントの自然の解釈は、かくてデカルトの二元論を哲學的に結論づけたものであつた。但し、カントは理論理性としての自然認識の領域においては神の存在、靈魂不滅、そして人間の自由を否定したが、これを実践理性の領域たる道德の場において新しくとりあげた。自然を對象とする科学學問の領域では否定したが、実践的な道德的行為の世界において新しくみとめていくことになる。ここで論者の言いたことは、理性としての人間がすでに自然界をば單

に与えられたものとして受けとるのではなくて、自然界は人間の主観的理性のはたらきによりて構成されてあるものだということ、理論理性としての理性の人間が、自然に対してここでは主體的能動的な人間となっているということである。そして、更に道德における実践理性としての理性の人間ともなれば、その人間の能動的活動性というものが更に大きく強調されて来ているということである。カントは現実の道德的事実から出発して、そこに無条件的な命法を実践理性たる良心が良心自身に課するという人格の自由のあることを確立せんとした。実践理性たる良心は外的にかなる条件によつても、また感性的な欲望からも動かされるものではなくて、理性の命ずるところに従つてのみ自由に行爲する。即ち汝の意志の格率が同時に普遍的立法の原理として妥当するように行爲せよ、これが無条件的な定言的命法であつて、これこそ実践理性が自らすすんで自らに課するところの絶対的な道德律である。実践理性

の主体たる人格はこの道徳律に従う義務があり、しかも、それは自らすすんでの義務たる以上、いかなる峻しい道であつてもそこに人格の自由を自証していかねばならぬ。

かくて、カントにあつては神すら宗教としての特目の場を与えられず、それは道徳的立場からの要請としてのみ設定せられていく。この世において厳粛な道徳的な戦いに敗れて死んでいく善なる人々、或は正義人道を守りながら、生涯を孤独と悲局のうちを送りし人々、これら現世で不幸なりし人々が淨福などところへめでたく迎えらるるためには、神の存在と靈魂の不滅とが要請として求められたのである。しかし、これはあくまで要請としてのものであるから、実際の宗教よりすれば抽象性をまぬかれ得ぬ。宗教的な救いというものは、道徳的な要請ではなくて現実の体験的事実であるからである。いずれにするも、カントにあつては宗教はどこまでも道徳のためのものであつた。そして、このことはとりもなお

さず、カントの思想がどこまでも近代ヒューマズムの人間の立場を守りつづけていたということであつて、その人間の性格というものが理性的なものであつたということで、自然界に対して、或は道徳の世界においても能動的であり創造的なものであつたということが銘記されねばならない。

### 三、理性的自我より欲望的自我への転落

ところが、この能動的、創造的な近代人の生きる姿勢が、十九世紀から今世紀にかけて大きな悲劇をもたらし来たのである。即ちカントは近代人の性格として、自然界については物質として機械的なものとして受けとつたが、人間人格においてはその自由と自律とを力をこめて強調している。そして、自由な人格をば常に目的として扱い、決して手段視したり物件化することをきつく戒めた。人間人格の尊厳性を説いたのであつた。

ところが、十八、九世紀における科学技術の発展は資本主義社会の経済力をすばらしくあげることによつて自然を利用支配することによつて物的生活を大きく上昇せしめた。そして、近代の市民社会たる資本主義社会に活躍する経済人は、慾望の満足と利潤の追求とを生活の信条とした。利潤の追求による資本の蓄積は、やがてまた大きく生産力を増強していく。このようにして資本主義の経済体制の中に活躍する人間の性格は、経済体制の中の齒車に乗せられて、人間本能の慾望の満足と飽くなき利潤の追及に奔走していくのである。これが市民社会を支えたブルジョアジーの根性であつた。慾望的自我、利潤追求のブルジョア根性こそ人間の本性ということとなつて行つた。だから、ブルジョア社会においては人間労働の対象化される原料としての自然が単なる物質にすぎないことは当然であるが、更にはこの社会に労働し生産し消費して生きていく人間自身も、その理性的、人格的な自由な自我などというものを

遠くに失つてしまつて、人間も物質化され、非情化されてしまつていたのである。人格、節操、命と言つた人間存在の根源的なものは、現実の社会生活ではすべて金とか権力のもとに押しつぶされてしまつていた。人間も自然と同様な次元の物にまで頹落して行つた。

だから、十八世紀末から敬虔なキリスト教の家庭のふんいきの中で育つたカントが人間人格の尊厳性を説いて実に思想的な悪戦苦闘を通してこれを確立したと思つたであらうが、それは近代ヒーマニズムによつてとらえられた人間のあるべき理念としてとどまるものでしかあり得なかつたのだ。現実の人間のすがたはカントのこの理想主義的な人間像を押しつぶして、慾望本能の自我に屈服してしまつていたのである。

デカルトは人間を理性的自我として確立することによつて、二つの世界を切り落したと言われる。上に向かつてはそれまで長らく人間の上に君臨した神

を追いやった。そして、人間より下に向かつては動植物を始めとして、人間を生かしている母なる大地自然を足で踏みつづけて、これを単なる物として扱い、やがて経済的利潤の対象として扱う資本主義の人間の自由にまかせてしまったのである。しかし、いまや、自然の支配から、今度は資本主義文明の社会においては、理性的自我と宣言してうぬづけた人間自身が欲望の人間に変貌して、やがて人間の価値も単なる物と資本とによって計量されていくなさない一物件にまで堕ちて行つた。十九世紀から廿世紀にかけて、進歩の時代という合言葉をもって歴史はすすめられたが、その進歩の時代とは、かように自然と人間自身とがすべて物件化され、質より量へと換算されて欲望本能のままに駆使せられ、やがて環境破壊によるおそろべき公害を将来せしめ、地球や人間どもの破滅を予告することであつただ。

#### 四、環境破壊による公害の現実

ところで、現代における文明社会の病理たる公害の問題をとりあげる場合に、この問題は文明社会に生きる人間の問題とは独立に単に自然の問題としてとり扱われるべきものではないことである。言うまでもなく環境破壊とこれによる公害の事実、現実資本主義社会における人間の無制限なる欲望の追求より生まれ出ている問題であるからだ。人間が発明発展せしめた科学技術、そして巨大な機械を媒介として自然を利用から支配して来た結果のものであつた。だから、それは人間の主体の側における問題である。自然に対し、また人間社会に対してどのような姿勢で生きるかという現代社会に生きる人間自体の姿勢の問題であるということである。

さて、ここで自然破壊による公害が地球や人間の将来について恐るべき予告を与えていることについ

て、先ず科学者の報告の二、三に聴いておこうと思

う。先ず前提となるものは、地球上の人口増加とその食糧資源のことである。この地球上にいま世界の人口は四十億を数えるが、現在の条件ですすめば今世紀の末には人口は二倍の八十億となるという。以後の増加率は、理論上よりすれば、百五十年後には全地球上の人口がいまの日本人並の人口密度になり、六百年後には人間に与えられる場所は一平方メートルにすぎなくなる。そして、二千三百年後には地上に住むと仮定された人間の目方と、地球の重さと同じになるという。しかも、この驚くべき人口増加を一体地球資源は今後どのようにして養い得ていくものであろうか。現在人口二億のアメリカだけで、年間全地球上の生産物の半分を消費していると言われる。そのためにインドを始め東南アジアやアフリカでは、天災地変の度にいく万いく十万の餓死者を出している。アメリカ並の生活をすれば、地球上の年間の生産物では僅かに五億の人間しか生活が出来ぬ

事情となっている。

このように年々増加する龐大な人口を擁して、その上この地球上の公害によるさまざまな変調を大きく生じて行くとすれば将来はどういう結果となるだろう。現在空気、大地、河川、海洋等が大工場からはき出す毒物汚物によって大きく汚染破壊されて、人体を始め生物植物等に大きな害毒を与えて来ている。自然界に放出された鉛、水銀、カドミウム、石綿、DDT等は、鳥獣や農作物を殺し人間を不具にしている。

また資源不足のために石油や石炭による火力発電では到底追いつかず、当然にその資源を原子力発電に求めているが、やがてこれら原子力発電を始め、地球上にひろがる大工場からはき出される熱気は段々に海水の温度を高めていくだろう。そうすれば南北両極の万年氷が段々とけ始めるだろう。若し西極の氷山がすべてとけると、海水はいまより百二十メートル上昇することとなってモスクワが海港にのこると言



う。十米上昇すれば、大阪、東京、ロンドン、ニューヨーク等は水没するといふ。

また全地球の工地、家屋の燃料から排き出す炭酸ガス、ジェット機やロケットの吐き出す排気ガスが成層圏に蓄積して太陽エネルギーが地上に達することを妨げる場合には、この地球上に新しい氷河時代を現出することになるだろう。温度の点においても、年間、平均温度が一度下れば、日本では年間の産物が二割減ずると言われ、年間平均五度下れば人間の生存が出来ぬという問題が生まれてくる。暑さ寒さ、湿度等の自然界のほんのわずかな変化が、人体を始めとする生物、或は植物に敏感に異変を与えることは常に感じていることで、生物と自然との環境の適応調和がいかに重要であるかを説く生態学が、今日重要な学問となっていることがわかる。

そして、自然破壊の最大の恐ろしい結果を生んでいるのは原水爆の実験や戦争利用への恐怖である。神より逃走した近代人は現代にいたりて遂に神に挑

戦して宇宙自然の秘密をばくろした。しかし、中性子による原子核の破壊に成功し、日本人のいく十万人を最初のモルモットとして実験台にあげた人間どもは、あたかも魔法使いの爺さんの如くに、今度は反対に自分が魔法の笛で呼び出した悪魔たちに苦しめられる結果となつてしまつた。戦争利用による地球破壊もさることながら、今日すでにこの地球の上層においては、各国の水爆実験の競争によつて、この地球は完全に恐るべき死の灰によつて蔽われてしまつてゐる。その死の灰の中には原子病のもととなるストロンチウム九〇や生殖細胞を破壊して頭二つの子、足一本の子を生むような原因をなすセシウム一三七が含まれてゐる。これらの恐るべきものが、雨と共に地上に下りて来て植物農作物の中に入つてしまつてゐる。それを受けてゐる人間の人体にはすでにこれらのものの犯すところをなしている。

いま地球の成層圏をつつむこれらの死の灰は、二十年をへて半減する、更に二十年をへて残りの半分は

減るという。だから、永久になくならぬ。しかも、各国は勝手な理由をつけて水爆の実験を絶対にやめようとはしていない。しかも、日本は気流の關係でこの死の灰の降下を一番に多く受けるところとなっているというのである。

ここで、私は近代人に問うて見る。その人間中心主義の生きる姿勢について問いかえして見るのである。近代人の生きる姿勢は、そのうぬぼれの長い進歩の歴史を通して、果して正しいものであったかどうかと。答は明らかである。いまや近代人の生きる姿勢が根本的に問いかえされて、近代人は新しく生まれ変らねばならぬときに逢着している。近代という歴史が超克されねば、現代の終末ということも事実となるだろう。

近代的自我というものは、まことに人間のとらえ方としてはうぬぼれの最大なものであった。デカルトは人間を理性的なものとし、自然をば単なる空間に延長をもつ機械的な物質と規定することによつ

て、人間の上方に君臨する神を追放し、自分の下には動植物を始め自然を支配下におくことが出来た。このような理性的自我の立場から、学問道德等の人生宇宙を解釈し、創造し、人間存在の意義をば崇高な位置にまで確立したのがカントであった。カントは実に実践理性の立場から人間を人格的な自律自由なる存在として規定し、人間が禽獸から異り、また人間自身の感性的慾望的なものから解放されていることを強調した。そして、この理性的自我はやがてフィヒテを経てヘーゲルにいたると、絶対精神という神の座にまで宣揚せられて、自然界を始め人間の歴史的世界等の宇宙人生のすべてが、この精神の歴史的論理的な創造の産物となつてつつまれてしまう結果となった。理性的な透明な水晶で出来た華麗なる宇宙殿堂とでも言うべきものであった。

しかし、このときすでにこの理性によるこの壮大な宇宙的なゴシック式な殿堂は崩壊に傾いていた。即ちヘーゲルはこの壮大な理念の高層建築の殿堂の

足もとに、ボロをまとうて背をまるくして寒さにふるえながら生きる人間の陋屋のあることを忘れていたのである。それこそが現実には生きている人間のすがたなのであった。理性的自我とか、世界精神などと美しい抽象的な理想をかがけてみても、陋屋にうずくまるものからすれば、それは宙に浮く蜃気楼にすぎなかった。即ちキェルケゴールは一八四六年に「現代の批判」において人間の実存としての単独者の立場から、マルクスは一九四八年に「共産党宣言」において人間の社会的存在の立場から、この理性的な人間の理解を批判する。そして、ひきつづいてニイツェは超人の思想から理性的人間を批判して、地に忠実ならざる彼岸人（地上を逃避せる空虚なる道徳宗教の彼岸に生きる人）のやせこけた死人なりと痛罵した。

近代人はこの理性的なものを客観的で永遠的なものとうけとった。しかし、人間をかく理性的なうつくしきものと受けとるとき、現実には生きる具体的人

間の中にうずまぐ地獄の世界を見つめることを忘却している。人をだましたり憎んだり、裏切ったり傷つけたりせずしては生きていけないのが人間の現実なのである。この人間のエゴイズムは決して断つことの出来ぬ煩惱であるだろう。このようなものが果たして理性の力によつて統制されていくのか。カントは「汝なさねばならぬ、故になし能う」ときびしい道徳律を人格に課した。しかし、かかる人格などというものは、ざるですくいあげた抽象的な人間のイメージであつて、ざるの目をぬけてざらざらとぬけ落ちて、偽装して理性的人格の奥にうずくまる地獄のどろ沼を忘れてゐるのだろう。そして、人間は実存としてはいつでも死に向かつてゐる存在であるということである。理性哲学では人間の先験的な理論理性や実践理性の永遠性を説くことが出来ても、現実の実存としての人間は必ず死すべき存在であつたのである。このように人間の底にのぞかれた地獄の世界や死への道を、理性的自我はとらえることも

超えることも出来なかった。だから、その人間観において、その歴史観においていずれも甘い眺め方になり、特にその歴史観においては科学技術のすばらしい進歩発展に幻惑されて、きわめて楽天的な未来を予想するところの進歩的な歴史観が呈出されて来た。

しかも、実際に近代から現代にかけていわゆる理性的自我をその性格とした近代人の果たして来たことは、まるでその反対に等しい行動であったのだ。言うまでもなく個人においては実際には慾望的自我に奉仕して来たのであった。理性の奥にこれを否定してうずくまる人間の慾望本能のあることを知らなかったのだ。アウシュビッツからヒロシス、そして南京において集団的人間の慾望本能がいかなるものであったかがまざまざと示されてある。

## 五、キリスト教世界観の崩壊

ところで、いまや人間中心の生き方について、世界的規模において根本的に批判反省が加えられて来ている。それは科学的哲学的な立場からのみではない。特に今日生態学的立場から真剣に討議がすすめられている。しかも、これらの討議の根本がいずれも人間の地球上に生きていくところの生きる姿勢即ち世界観の問題にまで切りこまれているというところ、そして、デカルトによってとらえられた人間中心の二元論的解釈が、更にさかのぼってキリスト教の世界観そのものの中から生まれて来ているという意味において、キリスト教自体への批判がむけられているということである。そして、地球や人類の将来を守るためには人間の生きる世界観として東洋的なものにその解決の道が求められて来ているということである。

いまその一人であるリン・ホワイトの「機械と神」にきいて見よう。ホワイトはカリフォルニア大学の歴史学教授であるが、文明批評の分野において

アメリカ科学振興協会で行った「現下の生態学的危機の歴史的根元」なる講演が大きな反響を巻き起こした。「機械と神」はこの講演を中心に十一の論文より成るもので、ホワイの論旨はこの「機械と神」という標題からよくうかがわれる。この題名は、ほんやぐの場合の意識であって、原題は「神から天降る機械」と訳さるべきものである。即ち機械に象徴される近代科学技術の文明が、神、即ちキリスト教から天降って来ていることを強調していることが、この論旨の内容である。キリスト教では天地創造の唯一絶対の神を設定する。神は天地を創り光と暗とを分け、水界を生み地に植物を生ぜしめ、天体には昼夜を照らしめ、鳥と魚と獣とを生み、最後に人間だけを神の似顔として創った。「生めよ、ふやせよ、地に満てよ」と、人間は他の動植物等すべてを支配することをゆるされた。人間は神の分身を受けることによって動植物等の自然とは次元の異なる存在としてゆるされた。このような人間がこの地球を支

配することを神からゆるされたこと、即ちこの地上における人間中心の世界観が、やがて科学の領域においてデカルト的思惟となって、理性的自我という人間中心の立場から科学技術による自然支配というものに展開して行ったのである。

だから、このキリスト教の世界観がなければ、近代の理性的自我の上に生まれた科学技術も発展しなかったし、人間が地上の万物自然の支配者などという思いあがった姿勢も生まれて来なかったのである。科学技術の進歩がそのまま善であるという仮定がゆるされるならば、キリスト教は批判を受けないであろう。しかし、この仮定がゆるされぬとなれば、また歴史の事実はこのことを示しているが、ここにキリスト教はとてつもない罪の重荷を人類に負うているのである。実際、科学は自然を主観に対する実験の対象としてのみ扱う。キリスト教徒にとつては一本の木は物理的事実以上の何ものでもない神聖なる森などという考え方は、自然の中に精神を予

想するから、キリスト教にとりては偶像崇拜となつて許されない。

このように今日に見る地球上の環境破壊から公害にいたる生態学的危機の根元をキリスト教の世界観のうちに見るのである。そして、このようなキリスト教の世界観から出ている地上における人間中心主義や反物活論を救うものとして、ホワイトはもう一つのキリスト教的な考察を提案してくるのである。

それは中世のアッシジの聖フランチェスコの世界観である。自然は人間に奉仕する単なる物ではなくて、神の被造物としてそれ自体に価値をもつものである。自然のあらゆるものが、あらゆる生物が、神の被造物であることにおいて平等であることである。フランチェスコにとりては、太陽や月は兄弟姉妹であり、万物はそれぞれの個性を生かしつつ神を讃えてゐる。小鳥も人も、水も山もすべてが神の尊さをたたえている。フランチェスコはこのように人間が無制限に被造物を支配するという考えにかえて、

人間をも含んですべての被造物の平等性という考えをおいたのである。ホワイトはかくフランチェスコを生態学者の聖者に推したいと論じているのである。

私はこのホワイトの論旨に共感をもつものだが、キリスト教的世界観の崩壊を前にして、フランチェスコへの道は何としても余りに消極的な道と言わざるを得ない。キリスト教そのものの中では解決への道は困難ではないか。すでにシュワイツァー博士が、キリスト教的世界にありて極めて東洋的汎神論的な世界観に生きて、困難な、そして尊い実践をつづけていたことはよく知られている。「人間にとりて植物の生命も人間のそれと同じく神聖であり、苦しんでいる生命を助けようと献身する、そのとき人間は始めて倫理的である。生きとし生けるものすべてに対する無限の責任感の体験のみが、普遍的倫理として思考の中に基礎づけられる。人間対人間の倫理はそれだけでは全部ではなく、一般の中の一つ

の特殊な関係でしかない。したがって、『生命の畏敬』は愛、献身、共歎同苦、協力と名づけられるものすべてを内蔵している。」と、シェワイツァー博士は「わが生活と思想」において自らの世界観を語っているが、いかにも東洋的な思想性格を示している。

そして、もう一人現代のビートやヒッピーの生活の姿勢の中に積極的な解決を求めている米国の社会学者リチャード・ミーンズ教授を挙げておこう。彼は現代の生態学的危機を回避するには、超越的一神教のキリスト教ではなくて、現在のビートやヒッピーの奉じている東洋的な汎神論的な自然の受けとり方を強調している。

現在の生態学的危機は自然に対する人間の生きる姿勢が誤っているところから出ているのであるから、この問題は人間の道徳的な問題であって、単なる自然科学の問題ではない。川や海を廃棄物や薬品で汚し、鉱山を乱掘し、山林を荒廃させ、動物を不

必要に殺して来たことが今日の結果である。このような人口増加と物質消費増の圧迫のもとで、人間は何を基準として自然環境に適応すべきであるか。いま世界にひろまるビートやヒッピーの文学的生活的な動きの流れは、たしかにこの基準と姿勢とを示すものだろう。かれらは先進文明国の自然破壊や機械と資本との組織体制である文明の管理社会にくみ入れられることを拒否して、人間の生まれたままの自然の命のままに生きようとする。ロッキーの山上に集団的に禅の生活を求めたり、インドや日本の自然や国土に憧れてボヘミアンの彷徨の生活をつづける。かれらは人間性の喪失に自らの生活をもって抗議をなし情感的な汎神論的な自然の受けとり方に積極的な姿勢を示して、人間の命と共同の感情に生きていくのである。西洋のヨーロッパ・ヒューマニズムの伝統的思惟、即ち自然を単に物質と見て、機械的な利用と支配にまかせ、人間以下のもとのわり切って暴用する慾望のないき方とは反対に、自然を尊

び人間と共同の命に生きるものとする東洋的な汎神論的な受けとり方に生きるものであることを示している。

## 六、草木国土悉皆成仏の仏教的世界観

以上は先進文明国における生態学的社会病理に対して、真剣に討議されているところを述べて来たのだが、いずれもこれまでのキリスト教的世界観の崩壊を示し、東洋の情感的な自然の受けとり方にその人間の生きる姿勢としての世界観を求めて来ていることを知りうる。ここで、私は仏教の世界観が世界的視野において重要な役割を果すべきことを述べる場合となった。

人間が自然に対して社会に対して生きる姿勢を世界観人生観と言うのであったが、それならば特に人間の宗教たる特色を有つ釈尊の仏教の世界観とは、そもそもどのような性格のものであったか、先ず回想

されるのは、釈尊の成道の日の体験と思索であった。後世の大乗仏教の思想信仰はこのときの釈尊の宇宙的な自覚内容の開顯と展開であった。

ようやく東の空の白らむころ、小鳥はさえずり始めた。一葉一葉が新しき喜びに生き生きと息づいている。夜あけの清澄さ、あかるさ、この美しき姿を今までしみじみと深く考えたことがなかった。日の光、上る太陽の力、すべてにあかりを与え、めざめを与える。いままではわからなかったが、わが力で生きていると思ったのが、これこそ大きな誤りであったのだ。この大自然は互に助け、草木を生かし、人々を生かし、われはいまこれらすべてと共に生き生かされて、同じ一つの命の中に息づいておる。この大いなる命に生かされて、鳥の声にも陽の光にも、いまだ感じなかった新しき力と、共に助け合っている美しい姿を見ることとなった。おお親しき草よ、木よ、小鳥よ。すべてに拝まるるなつかしき、親しき、そして尊さをもつこととなった。



このような宇宙との縁起的一体感が、菩提樹下における釈尊のさとり的心境であつた。天地自然と共に生き、生かされて生きていく姿勢こそ、この大地の上に生きる人間の真実のすがたであつただろう。

すでに原始仏教においてはただ人間だけをとりあげて明示することはない。まして近代ヨーロッパの人間中心主義的な世界観人間観はない。常に衆生という言葉が用いられている。衆生とは衆縁生起ということで、因縁果において生ずるすべての生きとし生ける一切を言うのであつて人間だけをとりあげて言うのではない。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天等、更には草木等の自然界とも共同の命によつて互に生かされて生きていくことを提示している。この故に、釈尊八十年の生涯を終つてバツタイ河のほとりで涅槃に入り給うとき、このときの涅槃図を見ると、頭北面西の釈尊の周囲には、仏弟子やマツラ族の多くの信者は勿論のこと、さまざまな獣からさまざまな鳥類が集り来たりて、釈尊の大いなる死を悲

しみ慟哭している姿となつてゐる。更に釈尊をかこむ沙羅の木には、ときならぬのに白き花が咲いたといふことである。

この平和なる釈尊の大いなる死ということの中に、釈尊のさとりの内容がいかなるものであるかが象徴されていることである。この涅槃図に示されたところは、仏教の広大な宇宙一体感より来る慈悲の世界観を示すところの重要な意義をもつものである。即ち人間と自然との共生き、人間と動植物との共生き、そして人間と人間との共生き、われひとりが生くるにあらず、天地宇宙と脈搏相通じ、共同同悲の命の中に生かされて生きていくという仏教の敬虔な世界観が示されている。それなればこそ、真人釈尊の大いなる死は、弟子や信者は勿論のこと、草木にも動物にも悲しみはひしひしと迫つて慟哭となつてゐるのである。まことに、釈尊のさとりはこの通りに釈尊ひとりのさとり、めざめではなかつた。それは共生きする宇宙全体のさとりであり、開眼光

明であつた。それなればこそ釈尊の死という悲しみは、単に個人の悲しみに終ることなくして、釈尊と共生する大自然、大宇宙の悲しみであつた。山河慟哭であつた。

釈尊の死は世上の日常的次元よりすれば、巷間における日日に出会う一つの出来事であつただろう。しかし、宗教的次元よりすれば、釈尊の死はその成道の日と共に、この地球上に水爆が破烈したことよりも、また月の世界に到達せる事実よりも、もっともっと大きな出来ごとであつただろう。

この釈尊仏教の壮大な世界観を思想的信仰的に創造的発展的にととのえて行つたのが、大乘仏教における華嚴法華等の經典であつた。

華嚴經にありては、天地自然界が人間界に与える指導影響の壮嚴偉大なることを説いている。例えば自然界の樹木が夫々菩薩の名において夫々分に住して法を説きて、宇宙生命たる大毘盧沙那法身の宇宙人生の救済と浄化とを示現していく。特に第二天上

部における夜摩天空会における十林菩薩の活動は有名である。ここでは人法不二の仏教世界観から自然はそのまゝ人格者とされ、雲の如く十方より覆われし十林の森を代表して功德林、懺愧林、無畏林等の十林菩薩が躍りつ舞いつつ合唱する十讃歌は天上界における絶唱となつてゐる。この十聖歌は実は自然の木の葉一枚によりてもそれが色や音となつて、それが地上の人間に真実に生きることの姿勢を語り教へてゐることを物語るところのものである。

そして、華嚴經後篇の善財童子の求道物語にあらわれる五十三人の善知識の中には、天空にひかる日月星辰等が数えられ、大宇宙大自然からの啓示指導をうくることまことに尊いものがある。

そして、法華經にありては人間の自覚とか救いだけにとどまらず、国土成仏、草木悉皆成仏という宇宙人生の綜合進動しゆく一大生命の救済のはたらきを説示している。即ち同経方便品を中心として有名な一念三千の宗教啓示の思想が出来てゐる。先ず十

界とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、声聞、緣覺、菩薩、仏と衆生の世界をわけける。衆生と言つて、決して、人間だけの世界を言わない。しかも、この十界が夫々に融通し合い、自己の中に他の九界を可能体として含みもつから百界となる。その百界には夫々ありのままのすがたという如是相、夫々の性質という如是性と云つたように、如是体、如是力、如是作、如是因等の生きていく活動のすがたを示す十如是というものをもつから、百界に十如是で千如是となる。それにこれらのものの個体、その集合体、そして住む国土という三世間がある。そこで、三世間とは衆生の個体をとどのえるところの身と心という五蘊世間であり、それらの個体の集まる社会が衆生世間である。そして、十界の衆生の集りおるところが国土世間である。この国土世間とは草木国土を始め、自然界の一切を示すものである。この三世間を先きの千如是に乗けると三千となる。三千の諸法とは宇宙の総会の生命である。

そこで人間どものきわめて極く短い一念の中にもこの三千の諸法を具足していると言うのが、法華經の諸法実相、一念三千の宗教思想である。要するところ、瑣々たる人間の一念の中にも三千の諸法である大宇宙が具足されていることで、一念を放てば全宇宙にわたり、宇宙を収めば只今の一念に帰する。このように宇宙の大生命はただに人間のみにではなくて、草木岩石にも相通通し合つて、宇宙の有機無機、すべてのものがこの共同の命の中に脈搏相通じて生きているというのである。しかも宇宙間のすべての衆生は草木国土までも包んで、刻々と総合進歩の活動をすすみつつ最高の仏の絶対価値にまで向上進歩しつつあるのである。全宇宙をあげて仏たる完成の境位に向つて完全進化の道に発展しつつあるということである。

だから、この地上における有機無機と言つた生物無生物などと言つた区別の如きは、知識學問上の一つの仮設よりした分析的な判断からせられた便宜的

のものであって、宇宙人生の実相となるものではない。この全宇宙は一切をあげての生命の大活動体であって、人間と言えどもその活動的生命の中の一つの細胞にすぎず、草木の如きは、言わば人身における毛髪のものだろう。だから、人間の仏への完成成仏は同時に毛髪の成仏でもある。だから草木の成仏ともなる。日蓮上人が「草木成仏口決鈔」で、「草木にもなり給へる寿量品の釈尊（宇宙生命）なり」と言われているのはこのことである。

この法華経の生命の宗教哲学の説示しているところは、華嚴哲学と同じように、この宇宙は総合進動しゆく一大生命体であって、相互に融通無碍の共同の命に息づきながら、それぞれの個性を生かしつつ仏への向上の発展を辿っているということであった。だから、人間が一番にすぐれ、動植物の如きは人間に奉仕するためにあるものであるとか、自然界は生命のなき単なる物質であるなどというこう慢な解釈は仏教の世界観には微塵だにない。全宇宙あげ

ての完全進化、即ち仏への救いを至禱しゆくところに人間の共同責任がある。慈雲という古のご先覚が歩くとき錫杖をもって虫どもに足もとをさげさせるために地をつきて音を出してゆかれたこと、教化の旅から帰られし道元が永平寺の門前で喉をうるおすためにいづばいの水を求められしとき、柄杓に残した半分の水を弟子が無難作に地べたに放りすてようとしたとき、これをきつく誠めて、半杓川に返えされたごとき、東洋の仏教者が天地自然と同体の命に生きて来た尊い姿勢を見ることが出来る。

なお、ここで注意しておきたいことは米国の生態学者らが現代文明の病理をキリスト教からデカルトへとヨーロッパヒュマニズムの世界観的危機を訴えて、東洋的な汎神論的な自然観なり世界観に解決の道を求めている心情はよくわかる。またこうした立場からビートやヒッピーが、仏教特に禪の生活に憧れてインドや日本に自然を求め仏道を求めて来ていることの意味はよくわかるのである。しかし、仏教

は西洋で言うていろいろゆる汎神論とは異なるということに注意しておきたい。たしかに仏教の世界観には上述して来たところからも感じられるように、汎神論的な性格をもつだろうが、例えば悉有仏性とか草木国土悉皆成仏などということから、直ちにこれを汎神論と同一視することは適當ではない。汎神論という世界観はヨーロッパの例えばヘーゲルの壮大な精神哲学などに見る如き哲学論理であって、すでに自然界や歴史的社會に理想の絶対価値（神）が実現されているという人生観であって、そこには個々の事物がそれぞれの個性を保ちつつ全体の調和の中に常に向上運動しゆく活動を見ない。だから、この汎論理的な世界観は、静止的な現状に満足するから停滯維持ということになる世界観人生観である。これに対して、仏教的世界観はこのような哲学的理念としての観念的のものではなくて、生命の發展的向上的な生ける活動体を示すものであった。

## 七、浄土教念仏者の生きる姿勢

そして、最後に浄土教を日本に確立された法然上人の念仏者の生きる姿勢を示された有名な言葉を述べておこう。

法然上人の念仏宗教は上來論述して来た釈尊佛教から大乘佛教の華嚴法華等の佛教の根本思想をふまえて、これを誰人にも直ちに今日只今の生活のうえに実現することの出来る道をおしえられた。華嚴や天台等の佛教の壮大で深い思想信仰も、それが近代ヨーロッパの人間中心のうぬぼれた世界観とくらべて、いかにすぐれまたいかに尊いものであるかは明らかである。思惟する自我などという、抽象的な独存独在の自我などというものを立てること自体、人間のうぬぼれと高慢の限りであった。人間自体が、実はこの大宇宙、大自然の中から進歩と保育を全うして生まれて来たものであったはずである。その人

間が理性的人間などと自己を独存独在的に主張して生まれ出て来た母なるふるさとに反逆をして来たのである。いまや、人間の本当の姿、本当に生きることを教える仏教的世界観によって、ヨーロッパ的な近代的自我を克服して行かねばならぬ。但し、この仏教的世界観なるものがいかに壮大な尊いものであつても、それが単に思想としての深さにとどまつていてはならぬ。その世界観の思想に世界の誰人もが容易にめざめて生きることの出来るものでなくてはならぬ。それが今日の文明を建てなおすために誰にでも実行の出来る世界観人生観でなくてはならぬ。そして、このことが法然上人の念仏生活において、いつでもどこにでもそのままの姿に実現されることとなつたのである。

「現世をすぐべき様は、念仏申されん様にすぐべし。念仏のさまたげになりぬべくば、なになりともよろづをいとひすてて、これをとどむべし。……衣食住の三は念仏の助業なり。これすなはち自

身安穩にして念仏往生をとげんがためには、何事もみな念仏の助業なり。三途へ返るべきことをする身をだにもすてがなければ、かへり見はぐくむぞかし。まして、往生ほどの大事をあげみて念仏申さん身をば、いかにもくはぐくみたすくべし。もし念仏の助業と思はずして身を貪求するは、三惡道の業となる。極樂往生の念仏申さんがために自身を貪求するは、往生の助業となるべきなり。万事かくのごとしと。」

これは禪勝房への詞として知られた念仏者の生活態度である。私たちの衣食住というものはそこに住む人間が念仏生活たる真実の人生に生きるためのものでなければならぬ。若し病氣であつたり、また寒さのためにわが身を害するようであつては、本当の人生を全うすることが出来ないから、十分に栄養もとりに十分に暖をとるのもよい。真人生を生きていく念仏生活こそが主人であつて、衣食住はこの主人につき従うところの言わば従ひ人の立場にあるものだ

らう。それなればこそ、念仏生活の中に衣食住のすべては意義づけられて、真人生の尊い内容となっていく。そうではなくて、人生に真実の光も命も見出すことなく、ただ利害損得に右往左往して慾望の自我にのみ狂奔していくのであるならば、この人を守る衣食住は単なる物質でしかなく、まして金殿玉楼に飽食暖衣するが如きは、そこに何らの真人生の意味もなく、かかる人は無益に自らの生かされている環境自然を破壊し、自分と兄弟である動植物までも殺生し、やがては地獄ゆきの自分と共に衣食住の命をも地獄に墮していくことになるのである。今日世界にみる環境破壊とは、人間の慾望、自我の満足だけのものである。まさしく念仏の助業と思わずして身を貪求するは、三惡道の業となると仰せられている通りである。いまの世界人類は地獄行きの道をばく走しているのだ。

極楽往生とか念仏生活とか言う真人生というものは、この地上にありて、自分ひとりの力で生きるの

ではなくて、天地自然との共同の命にめざめつつ、大いなる命に生かされて生きていく謙虚な自覺とよろこびの生活を言うのであった。法然上人によりて確立された日本浄土教の信仰は、現代の社会病理の解決への道を明確に示されているものであった。

現代の文明世界を建て直す道は、この仏教的世界観による人間の生まれかわりなしには出来ない。自然と人間とをやがて死滅へ導くか、或いは新しい調和に向かって回復しうるかどうかは、実にこの人間と人間との共生きの平和、人間と自然との共生きの調和を説く仏教的世界観によるより他に道はないのである。いまこそ、仏教者は世界的規模において仏者の力量を身をもって示すべきときであるだろう。そして、自然を扱うにしても、社会の体制の改造や国の福祉を全うする場合においても、先ず自らがこの壮大にして謙虚なる仏教的世界観にしっかりと足をつけて動き出すことである。

(参考)

ベルジャエフ「現代における人間の運命」(野口啓祐訳)

リン・ホワイト「機械と神」(青木靖三訳)

村上陽一郎「近代科学を超えて」

シュワイツァー「わが生活と思想」(著作集第二卷)

ケロアック「禅ヒッピー」(小原広忠訳)

(昭和五十一年九月)

吉村貞司「危機の時代」(人間性の根源を求めて)

谷口陸男「アメリカの若者たち」(岩波新書)

華嚴経

法華経

法然「選択集」及び「法語」